国立国語研究所学術情報リポジトリ

国語研の窓 第27号 (2006年4月1日発行)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001934

国語研の窓 27号

平成18年４月１日　第27号　発行　独立行政法人国立国語研究所
Independent Administrative Institution: The National Institute for Japanese Language

編集　国立国語研究所普及広報委員会
「国語研の窓」部会
〒190-8561 東京都立川市緑町3591-2
電話 042-540-4300　FAX 042-540-4334
URL http://www.kokken.go.jp/

立川西大通り沿いの桜

もくじ

暮らしに生きることば　1
研究室から：
『言語行動における「配慮」の諸相』について　2
解説：大学院教育へのさらなる参画　4
研究所西側から見た山並み　4，5
ことばＱ＆Ａ　5
解説：「外来語」言い換え提案 第１回～第４回 総集編　6
第29回「ことば」フォーラム報告　7
刊行物紹介・新刊案内　8

暮らしに生きることば

「危険水域」と「危険水位」

集中豪雨を伝えるインターネット上の新聞記事に「○○川が危険水域に達し～」という表現を見掛けました。一瞬，これは「危険水位」の間違いではないかと思いました。「水域」というのは，平面的な広がりを持つもので，川がどこかの水域に達するというのは考えにくいからです。

気になって，「危険水域」と「危険水位」の実際の用例を毎日新聞のCDデータ集（1991年～2004年）で調べてみたところ，興味深いことが分かりました。

「危険水域」という言葉は，合計116回使われていますが，本来の意味の「水域」を表す例は，「戦争による危険水域を航行する商業船」「核実験の危険水域拡大」など４例にすぎませんでした。それ以外は，「〔改選議席数が〕51を割り込めば政権は危険水域に入る」「株価は危険水域に入った」のように，政局，財政，経済，社会情勢などに関することで比喩的に使われた例でした。自然現象について使われた例が１例ありましたが，ほとんどは人間活動の所産について用いられる例で，用法として固定化しつつある様子がうかがえます。形の上でも特徴が見られ，「危険水域に入る／近づく／達する／突入する」という慣用句的な形で多く使われています。

冒頭に挙げた「○○川が危険水域に達する」もこのような比喩と考えれば無理なく解釈できそうですが，似た文脈で「危険水位」を使うために，やや違和感が伴うことはいなめません。

一方，「危険水位」の方は29件あり，実際の水位を表す例が多く，比喩的に使われている例は６例でした。比喩の場合，こちらも国際関係や経済活動など政治経済的な意味で用いられているところが「危険水域」と共通しています。似た語形で同じような比喩があると紛らわしいので，こちらは比喩としては用いられなくなっていくのではないでしょうか。

なお，「危険水位」という言葉は，平成12年５月建設省（当時）と気象庁が分かりやすい洪水予報を目指して採用したものです。

（山崎　誠）

研究室から

『言語行動における「配慮」の諸相』について

●『言語行動における「配慮」の諸相』の刊行

このたび国立国語研究所では，研究報告書『言語行動における「配慮」の諸相』を刊行しました。これは，かつて当研究所が行った「敬語」に関する調査の報告書です。

●国立国語研究所の敬語調査

国立国語研究所では，1948年の創立まもないころから，「敬語」を重要な研究課題のひとつと位置づけ，国民の敬語使用や敬語意識に関する研究を展開してきました。

地域社会での敬語については，愛知県岡崎市や秋田県・富山県の小集落において調査を行っています。職場の中での敬語については，ある企業内での社員間の敬語に関する調査を行っています。最近では，職場や地域社会で活動する前の世代である中学生・高校生を対象に，学校の中で生徒たちが敬語をどのように使い，意識しているかの調査を行っています。

敬語というのは，コミュニケーション場面において，相手や話題の人物など他者に対する「配慮」を言葉で表わすしくみと言えます。典型的には，尊敬語，謙譲語，丁寧語のような敬語専用の表現のことです。敬語研究と言うと，こうした表現の使用を研究対象としていると思われるかもしれません。実際，上に紹介した国立国語研究所の研究では，それも研究対象としています。

●相手に対する配慮は敬語だけではない

しかし，他者に対する「配慮」は敬語だけで表現しているかと言うと，どうもそうではないようです。

たとえば，パソコンの調子がおかしくなってしまい，機械に詳しい人に来て見てもらうとします。きょうの午後に来るよう頼む場合，「きょうの午後来い」と言う人はまずいないでしょう。では，「来る」を尊敬語に変えて「きょうの午後いらっしゃい」とすればいいかと言うと，これもやはり変です。確かに「来い」よりはましですが，どうも上から人を見下ろしているようで，丁重に接している感じはしません。これに対して「きょうの午後来てください」は，「いらっしゃる」や「おいでになる」や「来られる」のような尊敬語を使っているわけではないのですが，先ほどの「いらっしゃい」と比べるとはるかに丁重な感じがします。これはいったいどういうことでしょうか。

日本語では，自分の益となる行動を相手におこさせようとする場合，相手の行動を尊敬語で表現するよりも，それによって自分は恩恵を受けるのだということを表現すること，すなわち「〜ていただく」や「〜てくださる」あるいは「〜てもらう」を付ける方が，はるかに相手に丁重に接していることが表現されます。

「〜てくださる」は自分が恩恵の受け手のときの表現ですが，逆に恩恵の与え手のときは「〜てさしあげる」となります。では，この表現は実際に使えるでしょうか。

たとえば，重い荷物を持っている人を助ける場合，「持ってさしあげましょうか？」は使えそうです。しかし，どこか恩着せがましさが感じられます。相手が会社の上司の場合はさらにそのニュアンスが出てしまい一層使いにくいのではないでしょうか。むしろ「持ちましょうか」の方がいいくらいです。

こうした「やりもらい」の表現は，日本語において敬語と同様に，あるいは場合によっては敬語以上に，相手に対する配慮の表現として機能しているようです。

●理由の表現，詫（わ）びの表現

相手に対する配慮として機能している表現は他にもありそうです。たとえば会社で，コピーを取ってきてくれるよう頼む場合を考えてみましょう。それを仕事のひとつとしている人に対してであれば「コピーとってきて」と単刀直入に言えるかもしれませんが，そうでない人に頼む場合は，「ちょっと今忙しくてさ，悪いんだけど，コピーとってきてくれないかな？」のように，理由を述べたり，詫びを言ったり，文末を相手の可否を問う表現にすることを日常的に行なっています。考えてみればこれらも，相手に対する配慮を言葉で表したものと言えます。

●あいまいに言うか，はっきり言うか

相手から善意で何かを勧められてそれを断るということは日常よくあります。そのようなとき，「結構です」とか「いりません」のようにはっきり言うことを避けて，「あっ，でも，ちょっと…」のように，断りの核心にあたる部分はあえて言わずあいまいにぼかすことを私たちはよく行なっています。相手との関係を考慮してのことです。

その一方で，相手から重要なことを頼まれてそれを断るような場合は，「あっ，でも，ちょっと…」のようなあいまいな言い方だと相手に十分意思が伝わらずかえって迷惑をかけることがありうるため，「あっ，でも，○○なので，申し訳ないんですが，ちょっと無理です」のようにあいまいでない言い方をすることもよくあります。

同じ「断る」という状況でも，はっきり言わないことが相手への配慮である場合と，はっきり言うことが相手への配慮である場合とがあるようです。

●近づくことによる配慮

このように，相手に対する配慮は，敬語だけでなく，いろいろな表現によって実現されています。

もっとも，これらには共通する特徴も認められるようです。一言で言えば「相手を尊重する」「相手をたてる」ということです。「敬意」と言い換えてもいいかもしれません。

ところが，それらとは根本的に異なる発想に基づく「配慮」もありそうです。それは，「相手に近づく配慮」「フレンドリーになる配慮」とでも言える配慮です。

若者がよく使うタイプの表現に「話とかしたよ」「ダメみたいなこと言われて」のようなあいまいな表現があります。これらは，仲間うちの言葉として，相手との心理的距離を縮めたり会話を促進する機能を持っていると言えます。距離を置かない親密な関係を築いたり確認したりするという配慮で使われている表現と言えそうです。「敬意」というよりも，もっと広い概念である「配慮」と呼ぶのがふさわしい表現のひとつです。最近よく聞かれる「いいっすよ」のような表現も，一応「です」を付けて敬意を表わす一方で，「です」を「っす」と崩すことで相手に少し接近するわけです。近づくことの配慮が現れた表現のひとつと言えそうです。

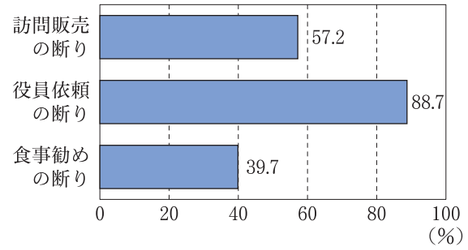
●敬意や配慮に関する調査

このように，他者に対する「敬意」や「配慮」が敬語だけで実現されているわけではないことについては，敬語研究でも最近注目されるようになってきました。

こうした研究動向を受けて，国立国語研究所では，「敬意」や「配慮」が日常の言語生活の中でどのように実現されているか，それには地域差や年齢差や性差があるのかないのかを明らかにすることを目的とする調査を実施しました。調査は，1996年から1998年にかけて，仙台市・東京都・京都市・熊本市の市民432人を対象に面接調査の形で行いました。他者に依頼する場面や，断りを言う場面など，いくつかの場面を想定させて，回答者自身ふだんどのように言っているかを発話の形で回答してもらいました。また，特定の表現に対する意識なども尋ねています。高校生には，面接調査とは別にアンケート調査も実施しました。それらの結果を分析したのが本書『言語行動における「配慮」の諸相』です。

その中からひとつ紹介しましょう。

たとえば，相手から頼まれたり勧められたりしてそれを断るとき，「無理です」とか「できません」のような，断っていることを明示的に示す表現を使った回答者の割合は次のグラフのとおりでした。役員を引き受けるよう頼まれて断る場合は数値が高くなりますが，食事を勧められて断る場合は数値が低くなっていることがわかります。



本報告書は，私たちが毎日の生活の中で他者への「配慮」をどのように行ったり意識しているかについて数量的にその傾向を知るための有益な情報源となっています。（尾崎 喜光）

解　説

大学院教育へのさらなる参画

国立国語研究所は，平成13年10月から実施している政策研究大学院大学，国際交流基金日本語国際センターとの連携大学院プログラムに続き，平成17年４月から，一橋大学大学院言語社会研究科（国立市）との連携大学院プログラム「日本語教育学位取得プログラム」に参画しています。このプログラムには，一橋大学大学院言語社会研究科，一橋大学留学生センター，国立国語研究所の三者が参画しています。

一橋大学大学院言語社会研究科は，学部を持たない独立大学院として平成８年に設立された研究科で，世界における多種多様な問題を言語と社会をキーワードに分析することを目指した研究・教育を行っています。また，一橋大学留学生センターは，同じく平成８年に設置されたセンターで，特に専門日本語教育について豊富な研究と実践の蓄積を持っています。

「日本語教育学位取得プログラム」は，この二つの組織に国立国語研究所を加えた三つの組織のそれぞれの特長を生かし，日本語教育学，日本語学，日本文化を総合的に学べる場を提供することを目指しています。学生の背景も様々で，修士課程１年の学生には，留学生や日本語教育経験者が含まれます。現在は修士課程だけですが，平成19年４月には博士課程が発足する予定です。

この連携大学院プログラムでは，国立国語研究所は日本語学の分野を担当しています。現在は，井上優（日本語教育部門）が対照言語学，前川喜久雄（研究開発部門）が音声学・音韻論，山崎誠（研究開発部門）が語彙論・計量言語学の演習を担当しています。また，田中牧郎（研究開発部門）がコーパス言語学の講義を担当しています。井上，前川，山崎の３名は，プログラム運営，論文指導も担当しています。

一橋大学と国立国語研究所は，場所が比較的近いこともあり，学生は積極的に国立国語研究所の図書資料などを活用しています。また，大学とは一味違う日本語研究の現場に触れられることも，他の大学院では得がたい経験になっているようです。国立国語研究所にとっても，若い研究者の卵との交流は，研究を進める上でよい刺激になりそうです。

なお，本プログラムに関する詳しい情報は，国立国語研究所及び一橋大学言語社会研究科のホームページに掲載されています。　（井上　優）

ことばQ&A

※この欄は，当研究所に実際に寄せられた「ことば」に関する質問にもとづいています。

質問　職場で若い人が早朝一番のあいさつやメールの書き出しに「お疲れさまです」を使うことが多くなっていて気になるのですが。

回答　仕事上のつきあいや事務的な連絡であっても，何かあいさつ言葉がないと失礼になるのではないかという配慮が働くものです。

本来「お疲れさま」は「ご苦労さま」と同様に，「労をねぎらう」という行為から発する言語行動であることから，上の者が下の者に使う表現とされてきました。確かに，これまで年齢や職階など，目上・目下の縦の人間関係を軸にする社会では，使う場面をわきまえないと問題になる表現の一つでした。

しかし近年，例えば1998年に国語研究所が調査した東京都民（20〜70歳）1,000名余りの回答によると，「お疲れさまでした」を上司に使うことに肯定的な評価をする人は９割近いという結果になっています。そのうち，20代〜40代ではどの世代もほぼ同率（９割前後）なのに対して，50代以上の支持率が若干下がる傾向があります。また，男性より女性のほうが肯定的な回答が多いことがわかります。ですから例えば50代の男性と，20代の女性では年齢や性別による受け取り方の違いがあると言えるでしょう。

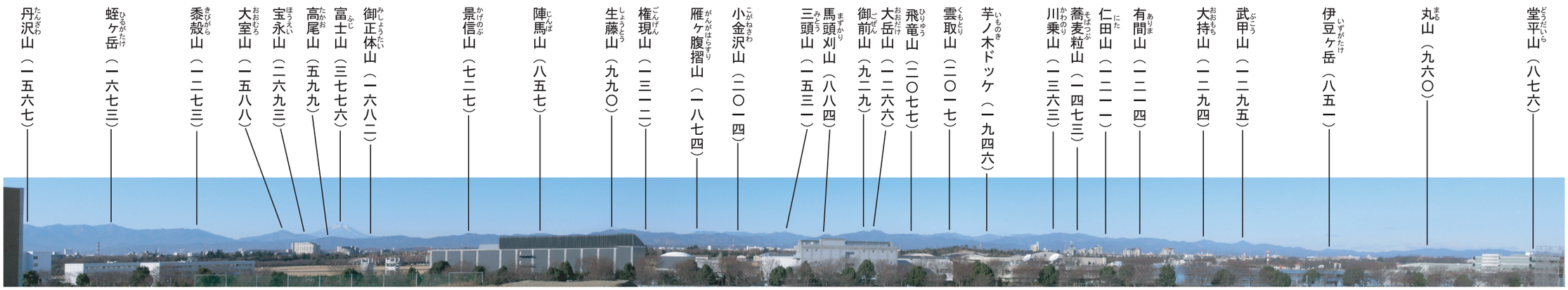
同じ調査で「ご苦労さまでした」の使用が３割の支持であるところからも，「ご苦労さま」にはまだ目上の者が目下の者に使うという意識が強い一方で，「お疲れさま」は使いやすいあいさつ言葉になっていると考えられます。

最近では，派遣会社の社員研修などで職場の常套（とう）的なあいさつ言葉として，「お疲れさまです」を教えていると聞きます。朝会ったばかりの人やメールの書き出しに必ず使う，ということのないよう，状況を考えて場面により使い分けることが必要です。出先から戻った同僚に気持を込めて「お疲れさまでした」と言えば，疲れも癒（いや）されるということではないでしょうか。　（塚田　実知代）

研究所西側から見た山並み

良く晴れた日には，４階西側のベランダから山並みが美しく見えます。

主な山の名前と標高（単位：メートル）を記しました。（大西拓一郎，協力：吉田雅子）



解　説

「外来語」言い換え提案 第１回～第４回 総集編

── 分かりにくい外来語を分かりやすくするための言葉遣いの工夫 ──

（国立国語研究所「外来語」委員会）

役所や報道機関などが，不特定多数の一般市民に対して情報を伝える公共的な媒体で，分かりにくい外来語を多用することが，円滑な伝え合いの支障になっています。「外来語」委員会では，この問題を解消するために，分かりにくい外来語を言い換えたり説明を付けたりする，分かりやすく伝える表現の工夫を提案してきました。平成18年３月に，４回目の検討結果として35語を発表し，これと合わせて，平成15年から提案を重ねてきた４回分176語について，「総集編」を公表しました。

この提案は，白書や広報紙，新聞でよく使われる外来語について，国民約2,000人に対して理解度の調査を行い，理解度の低かったものを対象にしています。下に示した「リデュース」の提案例のように，見出し語の後に星印で，理解度の段階を示しています（この場合は，理解度は最低段階の25％未満です）。

公的な場面で情報を伝える立場にある人が，分かりにくい外来語一つ一つにどのように対応すれば，分かりやすく伝えることができるのか，そのための工夫や，知っておくと役に立つことがらを整理して掲載しました。

日本語として使われる場合に最も適切な言い換え語を示し，実際の具体例に則して言い換えを試みることができるように用例を添えました。また，外来語に説明を付ける場合に使える簡潔な意味説明を提示しました。「リデュース」の場合は，英語 reduce の「減らす」という意味のうち，ごみになるものの発生を抑制することを表す，環境分野の専門語として日本語に取り入れられました。その背景には，国の政策を中心とする動きがあり，関連概念を表す外来語とともに，「リデュース」が使われています。こうした事情についても解説し，公的な情報伝達の場で，概念整理を行った上で，表現を工夫することができるように配慮しました。

この総集編は，研究所ホームページに掲載しているほか，平成18年６月に「分かりやすく伝える外来語言い換え手引き」（ぎょうせい）として，出版も予定しています。　（田中 牧郎）

リデュース　　国民全体の理解度 ★☆☆☆　60歳以上の理解度 ★☆☆☆

言い換え語　ごみ発生抑制

用　例　北九州市はリデュース（ごみ発生抑制）の取り組みを始めた。

意味説明　ごみになるものの発生を抑制すること

手引き
- 英語の reduce は，減らすことを意味するが，外来語「リデュース」は，環境分野で，ごみを減らすことを意味する語として取り入れられた。
- 天然資源の消費を抑え環境への負担を減らす循環型社会の実現に向け，国が策定した「循環型社会形成推進基本計画」（2003年）に，廃棄物の発生を抑制する「リデュース」，使用済みの製品を再使用する「リユース」，廃棄物を原材料にして別の製品を作る「リサイクル」の三つが，「3R」としてうたわれている。
- 「3R」を話題にする場合も，「リデュース（ごみ発生抑制）」「リユース（再使用）」「リサイクル（再生利用）」などのように説明を付けたり，言い換えたりする配慮が望まれる。
- 「リユース（再使用）」や「リサイクル（再生利用）」が，再び使うための処理の過程で環境に負担をかけるのに対して，「リデュース（ごみ発生抑制）」は，ごみになるもの自体の発生を抑えるものである。環境に対して負担をかけない「リデュース（ごみ発生抑制）」は，循環型社会実現のための「3R」の取組の中では，最も優先度が高いと言える。
- 「廃棄物の発生抑制」「ごみの減量」「ごみを減らすこと」「ごみをなるべく出さないこと」のように，説明的な語句を用いるのも分かりやすい。

その他の言い換え語例　発生抑制　廃棄物の発生抑制　ごみの減量　ごみをなるべく出さないこと

「ことば」フォーラム報告

第29回「コミュニケーションとは何か ── 伝え合いの言葉 ──」

第29回「ことば」フォーラムが，２月18日（土）午後，国語研究所・講堂で開催され，参加者は約160名でした。

前半は，以下の３件の発表・発題がありました。

(1)　小池保氏（尚美学園大学，元 NHK 解説委員）は，「身も心ものびのびするコミュニケーションのススメ」と題し，アナウンサーとして大阪に赴任した際の経験を基にして，放送文化論の立場から，関西をはじめ，地域のことばの背後にある緩やかで，豊かな発想や精神性などに焦点を当てました。そして，相手との関係性・位置取り，細かい需要等を探る時には，あいまいでありながら，いざ何かを決定した後には，徹底して合理的に対応する姿勢などに着目し，ギスギスする論理性ではなく，「のびのびする合理性のあるコミュニケーション」について推奨しました。

(2)　清ルミ氏（常葉学園大学）は，「健全なコミュニケーションを模索して」と題し，EU 諸国から仕事で来日した人々に対する日本語・日本文化の教授経験などを踏まえて，異文化コミュニケーションの立場から，①白黒つけないものの見方と婉曲（えんきょく）表現，②摩擦を恐れない不満表示などの重要性について焦点を当てました。具体的には，二元対立の世界にいる EU の人々が，万物同根という考え方の日本に来ると，「優しい気持ちになる」「自分が温かな心の持ち主だと思える」実態があることに触れました。一方，地域に定住する外国人が，「行けたらいきます」「間に合ってます」などの婉曲表現を習得したがっていることや，「怒り」「悲しさ」「クレーム」などの感情や不満の思いをうまく伝える方法を知りたがっている現状について触れ，「思い」を封じ込めず，表出が容認される地域社会づくりや健全なコミュニケーションを模索するには，①の見直しと②の容認が肝要であることを指摘しました。

(3)　箕口雅博氏（立教大学）は，「コラボレーションとコミュニケーション」と題し，コミュニティ心理学の立場から，学校カウンセリングの現場に焦点を当て，協働（コラボレーション）し，伝え合うための適切な環境を作る際の重要点を提示しました。具体的には，カウンセラーは個人と環境との適合を目指す「つなぎ役」であり，子ども個人の内面への接近だけでなく，個人を取り巻く環境に働きかけることの肝要性について言及しました。また，教師に家庭を訪問するように依頼したり，教師の子どもに対する理解の仕方や関わり方について共に考えたりして，専門家の立場から助言することが重要であることを述べました。

後半では，熊谷智子の司会でディスカッションが行われ，まず，会場からの質疑に対して発表者から応答が行われました。次に，杉戸清樹（国語研究所長）からコメントがあり，「あいまいさ」にはいらつかず，「せっかちさ」には怯（おび）えずカチンとこないことが肝要であり，くじけず，キレずに不満表示をしたり，コミュニティの一員として色々な立場の人と協働しながら「分かろう，伝えよう」と努力することが，角の取れた丸い関係性を構築することにもつながるであろうと指摘しました。

その後，発表者間のやりとりも活発に行われ，伝え合いのためには「一歩立ち止まること」で対話の相手のことばをわかろうとする「想像力」「柔軟性」と，「軽快なフットワーク」「緻密（ち）なネットワーク」そして「少々のヘッドワーク」が重要であることが，改めて確認されました。　（野山 広）

刊　行　物　紹　介

新「ことば」シリーズ19　『外来語と現代社会』

現代社会では，人々の生活の場面でなじみのない外来語を見聞きすることが多くなっており，そのことが人と人との伝え合いの支障になっている側面があります。新「ことば」シリーズ19では，そうした現代社会と外来語の状況を広く見渡し，問題のありかを照らし出し，現代に生きる人々は，外来語にどのように対応していけばよいのかを考えました。また，この問題の解消を目指した活動である，国立国語研究所「外来語」委員会による，「『外来語』言い換え提案」についても詳しく紹介しました。

座談会　天野祐吉（コラムニスト），鳥飼玖美子（立教大学教授）
道浦俊彦（読売テレビアナウンサー）
杉戸清樹（国立国語研究所長）

解　説　「『外来語』言い換え提案」は何を目指しているか／現代社会における外来語の実態／新聞記事の外来語／科学の知識を伝える言葉

言葉に関する問答集（17問）／**言葉のクリップボード**／**コラム**

参考資料（「『外来語』言い換え提案」抜粋）

国立国語研究所編　国立印刷局発行　平成18年３月　A５判　128ページ　定価483円（税込）

「ことばビデオ」シリーズ〈豊かな言語生活をめざして〉5　『日本語の音声に耳を傾けると…』

VHS 34分／対象は中学生以上，解説書付き，近日刊行

私たちは声の調子を変えることによっていろいろな気持ちや意図を伝えています。音声には方言による違いもあります。外国人の話す日本語の音声にも日本人と違うところがあります。さまざまな音声に耳を傾け，その働きや背景を考えてみましょう。

第１話　気持ちや意図を伝える音声
第２話　方言の中の音声
第３話　外国人の話す日本語の音声

「ことばビデオ」シリーズは，各都道府県の教育委員会を通じて，地域の視聴覚ライブラリー等に配布されています。

購入を御希望の方は，下記までお問い合わせください。定価は15,750円（税込み）です。
東京シネ・ビデオ株式会社　〒103-0022　東京都中央区日本橋室町 1-8-8
電話 03-3242-3151　FAX 03-3242-3182　http://www.tokyocine-video.co.jp/

新　　刊

1．**『言語行動における「配慮」の諸相』**（国立国語研究所報告123）
2006年３月／くろしお出版／A5 版横組み190ページ／税込2,625円

2．**新「ことば」シリーズ19『外来語と現代社会』**
2006年３月／国立印刷局／A5 版横組み128ページ／税込483円

©2006　国立国語研究所